



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	子どもの「居場所」はどこに?: 英国映像文化としての『 聖トリニアンズ女学院』と教育空間の変容(fulltext)
Author(s)	大谷, 伴子; 大田, 信良
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. 1, 68: 71-83
Issue Date	2017-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/146869
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

コドモの「居場所」はどこに？

—— 英国映像文化としての『聖トリニアンズ女学院』と教育空間の変容 ——

大谷 伴子*¹・大田 信良*²

英語学・英米文学・文化研究分野

(2016年8月26日受理)

要 旨

本論は、21世紀現在のコドモの「居場所」の表象を、成長の問題とともに、批判的吟味を行いながら、論じた。具体的には、『聖トリニアンズ女学院』というテキストを取り上げ、「グローバル・ポピュラー・カルチャー」との対立・矛盾を孕みながら対応したその英国映像文化に表象されたコドモの「居場所」の変容の意味を探ることにより、20世紀前半から20世紀後半さらに21世紀への資本主義世界の変化、そして、それともなう子どもの変化とりわけ学校の変化にみられる教育空間の変容を、歴史的に解釈することを試みた。旧来の福祉国家から1980年代以降急速に先進国で台頭し経済ならびに政治はもちろん社会や文化や教育におよぶあらゆるレベルで進行するのがみられたネオリベラリズムへの資本主義世界の変容において、旧世界の学校の子どものこうした新たな社会性なき「セカイ」のコドモへ変化がみられたことが、確認された。こうしたさまざまな変化は、労働者の再生産というレベルに翻訳・トランスコード化するなら、もはや近代国家の国内を中心とする製造業におけるナショナルな人材すなわち国民ではなく、グローバルな資本主義市場に適応し有用とされる人材が求められることを意味する。この意味で、コドモの「居場所」や成長する子どもをめぐる変化の問題は、なによりも、旧来の教育空間としての学校の変容とわかちがたく関連していることを認知しなければならない、と同時に、トランスナショナルな諸メディア空間やさまざまなコミュニティとネットワーク化されつつ連携が模索されるように新たな構築・編制がなされている教育空間において、学校やクラスルームにおける教育・学習がその少なからざる役割をこれまでとは別のやり方で担う学校の新たな意味の可能性についても、具体的な実践のイメージにつながるように想像したり思考したりすることができることを、本論は示唆しようとした。

キーワード：コドモ、居場所、英国映像文化、教育空間、ガールズ・スクール・ストーリー

1. コドモの「居場所」はどこに？

現在、コドモの「居場所」はどこにあるのだろうか。教育空間、あるいはまた、学校や教育の変容、について思いをめぐらしながら、子どもの変化について、歴史的に、認知・解釈することを試みてみよう。第2次大戦敗戦後またそして冷戦期における日本の資本主義・福祉国家においては、子どもが自己のアイデンティティ (identity) を形成し大人へと成長する場所は、なによりも初等・中等教育が行われる学校であり、それと相補的な近代的な核家族や (シャッター通りとなる前のかつて地方・田舎からの労働者を受け入れ・吸収した商店

*1 東京学芸大学 個人研究員

*2 東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 英語学・英米文学・文化研究分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

街のような) コミュニティであった、といわれる。つまり、旧来の子どもの居場所は、国家秩序や親の代理表象である教師が子どものモデルとして統治・管理する学校というナショナルな教育空間であった。それでは、21世紀の現在、現代グローバル世界に日々の生活を生き延びるコドモの「居場所」はどこに? コドモの「成長」あるいはサヴァイヴァルに関して、つまり、コドモがアイデンティティを確認したり帰属意識 (belongings) をもつことができたりするという点で、旧来の学校という教育空間は十分にうまく機能しているだろうか? それとも、見知らぬ文化的他者を含む友人たちとのソーシャル・メディアを媒介にしたグローバルなサイバー空間、グローバル・シティあるいは都会の街のストリート、「田舎」あるいは地方都市のショッピング・モールといった多種多様で不均質に結び合わされる異質な諸空間に、コドモはとりあえず「居場所」を求めているのだろうか? まずは、こうした問いを発することから、本論の議論をスタートさせたい。

21世紀現在のコドモの「居場所」について、その可能性を含めて肯定的に評価できる点、あるいは逆に、少なからざる問題を孕んでいて否定的にしか評価できない点、それぞれ、具体的に例をあげながら考察することができるだろう。¹ ここでは、そうした多種多様な条件とそれによって規定された状況に応じてさまざまな答えを一応のところ出すことのできる個々の答えを検討する代わりに、免許状更新講習の詳細な内容を規定した文部科学省告示第50号とともに示された「平成20年4月1日付け文部科学事務次官通知」を、考察あるいは解釈の対象となるテキストとして取り上げてみよう。この通知は、「1. 教職についての省察並びに子どもの変化、教育政策の傾向および学校内外における連携協力についての理解に関する事項」、および、「2. 教科指導、生徒指導その他教育の充実に関する事項」に分かれ、前者はさらに、以下のように細分される。すなわち、①教職についての省察、②子どもの変化についての理解、③教育政策の動向についての理解、④学校の内外における連携協力についての理解、という4つ。このうち②の内容は、本論が最初に問題にしたことに、まさに対応しているように思われる。興味深いことに、「子どもの変化についての理解」は、同じ細目を構成する「子どもの発達に関する課題」と区別されるかたちで、² 「子どもの生活の変化を踏まえた適切な指導の在り方」として言い換えられ、具体的な指導上の課題を適切に扱うことが「含めるべき内容」として盛り込まれているのだが、さらにまた、その留意事項に、「カウンセリング・マインドの必要性にも留意する」とともに、「居場所づくりを意識した集団形成」が提示されていること、このことが、きわめて注目にあたいる。

ここであらためて、「講義内容に関する各種基準」の個々の事項を統括する全体のポイントは実のところなんなのか確認しておこう。①教職について省察するその具体的内容として、「学校を巡る近年の様々な状況変化」に適切に対応することも、求められている。そしてまた、③教育政策の動向すなわち「教育改革の動向の概要」についての理解に続いて、④学校の内外における連携協力に関して、「保護者・地域社会との連携」すなわち、学校で教育を受ける生徒をめぐる先生と親のほか、「地域社会」との新たな連携の必要性が記述されている。³ このような教育空間における「変化」を認識し対応することは、実のところ、その「様々な状況変化」を産み出している、より広い社会のどのような変化を認識する必要があるということか。

20世紀前半から20世紀後半・21世紀への資本主義世界の変化、および、それにとまなう学校の変化・子どもの変化を、歴史的に解釈することを念頭におきながら、考えてみよう。この通知における留意事項として、「居場所づくりを意識した集団形成」は、「子どもの変化」すなわち「生活習慣の変化」をふまえた生徒指導だけでなく、「社会的・経済的環境の変化」に応じたキャリア教育とならべてあげられており、したがって、おそらくは現在の資本主義における経済そして社会のラディカルな変化・変容への適切な対応をはたすべき現代日本という国家の役割と同様に、「学級担任の役割」として「多様化に応じた学級作り」が、ある種不気味なトーンをとまなう無機質的・機械的に反復される併記というかたち (parataxis というレトリック) で、列挙されている。これにしたがえば、「子どもの変化についての理解」という言説が意味することは、次のようになる。21世紀の現在、学校という集団的な学びが日々なされる教育空間に求められているのは、そこでの集団との関係において多種多様なそれぞれの個人が「居場所」をみつけることができること、あるいは別の言い方をすれば、そうした居場所を確保するような集団を形成・編制すること、だと。

本論の目的は、コドモの「居場所」すなわち現在のさまざまな学問領域において帰属の問題として論じられるものを批判的に吟味することにある。具体的には、英国映像文化あるいは米国を中心的な結節点として発信されるようなグローバル化したポピュラー・カルチャーへの抵抗ならびに交渉・対応でもある英国映画をその部分 (あるいは「部分の部分」) として含むメディア文化を補助線として使用することにより、つまり、トラ

ンス・メディア空間において創造・(再)生産された映像テキストを含むさまざまなヴァージョンの文学・文化テキストを取り上げることにより,⁴ 旧来の代表的かつまた支配的な教育空間としての学校の変容を確認する, と同時に, その新たな意味や機能についても考察する。言い換えれば, 現代資本主義世界のグローバル・ポピュラー・カルチャーが描くコドモの「居場所」の変容を, その成長/反成長とあわせて, 歴史的に, グローバルに, 認知・解釈することが以下の議論で試みられるが, こうした試みは, 日本の(学校)教育空間での具体的実践の意味とイメージを思考・想像することにも向けられている。

2. 旧来の「教養小説」と「成長」の物語

かつて, たとえば, 第2次大戦後あるいは冷戦期と呼ばれる時代には, 「成長」の物語といえば, 19世紀英国の教養小説をその典型的なモデルとして考えていた, といえるかもしれない。たしかに, 「英文学」すなわち英国のナショナルな文学の特質は, ジェントルマンの概念・イメージを基本とする階級または階級意識によって論じられ説明されてきたし, 旧来の研究ならびに教育において, その代表的「英文学」の研究・教育の例である川本静子『イギリス教養小説の系譜——「紳士」から「芸術家」へ』は, ダイナミックな社会流動性や階級上昇に特徴づけられる英国の階級の問題とともに, 子どもがジェントルマンへと成長する物語を特権的に取り上げていた。そして, そうしたジェントルマンの理念を表象する物語は, 川本の本のサブタイトルにあるように, 19世紀以降の教養小説が描く「紳士」から英国20世紀の「芸術家」へ, そして, それを研究・教育する米国の大学・大学院といった教育空間へとその系譜あるいは変容をたどることができるものでもあったとするなら, 成長物語のモデルとしての英国教養小説は, 19世紀の英国にのみ限定されるというよりは, 20世紀の米国を中心とする資本主義世界において(あるいは, ひょっとしたら21世紀のグローバルな資本主義世界においても)典型的な成長のモデルとして普遍性をもつものとされうるのかもしれない。⁵

川本『イギリス教養小説の系譜』にしたがい, 旧来の教養小説の代表的作品を挙げるなら, まずは, チャールズ・ディケンズ『ディヴィッド・コパーフィールド』(1850)ということになる。あるいはこれに, 同じ著者による『大いなる遺産』(1860)やジェイムズ・ジョイス『若き芸術家の肖像』(1916), あるいは, 川本が扱っていない女性作家による少年ではなく少女を主人公とした成長物語であるシャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』などを挙げることができるだろう。これらの小説にみられる共通点を説明するために, 川本は, 冷戦期米国の代表的批評家, ニューヨーク知識人ライオネル・トリリングがヘンリー・ジェイムズ『カサマシマ公爵夫人』を英国ならびにヨーロッパの教養小説の伝統を引く教養小説として解釈した論文, 川本が言及する書誌情報にしたがえば『リベラル派の想像力』(1949)所収の「カサマシマ公爵夫人」(1948)を引用している。

『カサマシマ公爵夫人』は, 19世紀を貫く一連の小説群——19世紀小説の支柱とも言うべき小説系譜——に属するものである。その一連の小説群とは, 主人公の性格と環境によって定義づけられるものであるが, スタンダールの『赤と黒』, バルザックの『ゴリオ爺さん』及び『幻滅』, ディケンズの『大いなる遺産』, フローベルの『感情教育』を含むものである。ほんの少し定義を拡張すれば, トルストイの『戦争と平和』やドストエフスキーの『白痴』をも含め得よう。(川本7)

トリリングをふまえた川本の説明によれば, まず, 教養小説の主人公は, 共通していずれも, 「地方出の青年」である。この場合の「地方」は, 文字通りの地方ではなくその社会的出自を指すことも多い。そして, たいがいその主人公は, 「地方」育ちであるため, 単純で希望に胸ふくらませて人生の門出に立つ貧しく聡明ではあっても世事に疎い青年である。次に, プロットは, 人生の門出に立つ若い主人公が, さまざまな試練による精神成長をへて自己確立にいたる物語とされる。そして最後に, テーマは, 青年のビルドゥング(=人間形成)ないしは, 精神発達とする。これが, 旧来の教養小説すなわちビルドゥングスロマン(Bildungsroman)の特徴・特質として川本が提示したものだ(川本8-9)。

「精神の成長」とは何か, きわめて短く簡単に, 確認しておこう。「子ども」から「大人」に成長した主人公は, 人生の目的・意味を達成し紳士となる, 言い換えれば, 大英帝国を支えるジェントルマンという大人へと成長するのだ。また, シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』(1847)においては, 過剰な精神性を表象

するヘレンと過剰な肉體性を表象するバーサも成長することはなく排除されるのに対して、精神と肉體との調和・統一に達した主人公ジェインは、結婚して階級上昇し、ジェントルマンの妻・母として成長することが望ましいものとして提示されている。また、チャールズ・ディケンズ『デイヴィッド・コパーフィールド』(1850)においても、過剰な精神をあらわすドーラや、過剰な肉體をあらわすエミリというキャラクターとは違い、アグネスは精神と肉體の調和・統一を果たすことにより成長する。「コドモ」から「大人」に成長した主人公は、人生の目的・意味を達成し男の子なら紳士・芸術家となり、女の子なら良妻賢母となる。

「英文学」の特質を具現するとされる英国の教養小説は、近代国民国家の時空間におけるジェントリという表象、すなわち、孤児のように社会的出自が明確でない存在から都会に出てジェントルマンへと階級の階段を上る成長の物語、そして、地域社会の立派な名士・名望家として支配層に参入・合体することを目的=結末とする物語であった。旧来の「教養小説」という物語に描かれた子どもの成長とは、このようなものだったのだ。⁶

3. 映像テキスト『聖トリニアンズ女学院』(2007)と歴史的コンテクスト

こうした、「学校を巡るさまざまな状況変化」の背後にある広い社会あるいは資本主義世界の変化を歴史的に考察するために、『聖トリニアンズ女学院』を取り上げそこで表象されるコドモと学校の問題を考察してみよう。この映像テキストは、2007年UKフィルム・カウンシル(英国映画評議会)の後援を受け、制作には、公的資金が使われており、宝くじ(National Lottery)からあがる収益の一部がその財源となっている。その意味では、この英国映像文化としての『聖トリニアンズ女学院』は、単なる商業映画などではなく、ブレア政権期の英国国家が文化政策・教育政策の一環として生産したきわめて豊かで強力な公共性を備えたものである、と考えなければならない。⁷

さて、英国映像文化のテキスト『聖トリニアンズ女学院』は、かつて第2次大戦中の1941年に出版されたロナルド・サールの風刺漫画を一応の原作として、⁸あるいは、それにインスパイアされた一連の文学・文化テキストをさらにヴァージョン・アップするかたちで、21世紀の現代に舞台を移して映画という異なるメディアにおいて再発明したものである。全寮制の聖トリニアンズ女学院を舞台とした「超不良女子校を舞台に美女たちが大暴れ!痛快ガールズスクールムービー」、たとえば、これが日本で発売されたDVDの宣伝文句となっている。とりあえず、実際の物語の基本的構造やレトリック、あるいはまた、その歴史的コンテクストについては括弧に入れて、日本における紹介においてそのストーリーとされるものを、みておこう。

【ストーリー】悪名高き、全寮制女子校“聖トリニアンズ女学院”。校長のカミーラを叔母に持つアナベルは、父親の勧めでこの女子校に転入してくる。しかし、寮長のケリーを中心に、一癖も二癖もある生徒たち——悪ノりに付いていけずに、早速逃げ出したくなるアナベル。そんな聖トリニアンズ女学院は、財政難から経営の危機に瀕していた。さらに、新文部大臣のジェフリーは、自由奔放で規律がない聖トリニアンズ女学院を“まともな”学校に立て直そうと心に決める。この絶体絶命のピンチから学園を救うため、アナーキーな生徒たちが立ち上がった!怖いもの知らずの生徒たちは教員や仲間を巻き込んで団結し、知識やアイデアを集結させ、美術館からフェルメールの絵画を盗み出すという世紀の強盗を企てる——!!
果たして彼女たちの無謀な作戦は成功するのか——!?

『聖トリニアンズ女学院』が提示するのは、自由奔放ではあるが規律など一切存在しないかのような「無法地帯」の状況にある全寮制の女子校である。

『聖トリニアンズ女学院』の主人公は誰か。英国映像文化のテキスト『聖トリニアンズ女学院』においては、そもそも、19世紀英国の教養小説のように、主人公が個人として存在しているのだろうか。全寮制の女子高を舞台にしたこのテキストには、基本的にヒロインがひとり設定されているというよりは、むしろ、集団としてのコドモが物語における主人公の機能をはたしているように思われる。⁹現代英国における、人種的な多様性ではないにしても、それぞれ個別に多種多様なアイデンティティに特徴づけられた集団・グループといえるかもしれない。すなわち、まずは、容姿・外見の人工的につくられた魅力を武器にセレブを目指すお嬢さま系

(Posh Totty) と日本語字幕ではコギャルと翻訳されているチャヴズ (Chavs)。そして、数学やITの能力にたけていて株の売買もお手の物のような今風の理系女子すなわちオタク (Geeks) とゴスロリに間違えそうな不気味なファッションとメイクの外見の下に情緒不安定 (emotionally unstable) な内面を抱えるエモ (Emos)。主人公が集団性によって提示されているとはいっても、精神の成長を物語る旧来の教養小説にみられたような精神と肉体の二項対立によってこれら4つの集団を分類することも、無理ではないかもしれない。このような分類をあえてするなら、前者2つはあきらかに過剰な肉体的性をあらわしているのだろうし、後者2つの特徴となっているのは過剰な精神性であるとみなせよう。そして、主人公の精神成長の到達が期待される物語の結末では、これら2つの過剰な性質が調和・統合されるはずで、たとえば、この学校に転校してきてははじめはなじめずまたいじめも受けたまじめでどちらかという地味なアナベルがこれらの一癖も二癖もある同級生たちと友情・友愛の絆を築く過程で典型的な成長をあらわしている、といったように解釈してみたくなるかもしれない。

アナベルは、転校する前に、成績その他の面できわめて優秀・優良と社会的に評価される学校、チェルトナム女子学院で、実は、そこで優等生とされる教育大臣の娘にイジメを受けたのが原因で、トラウマ・心的外傷を抱えている、という設定になっている。もちろん、アナベルのアイデンティティ形成のために必要な家族は、娘をネグレクトし全寮制の学校にいわば遺棄する父親によって代表され、彼女の成長を見守る親の役割をはたす存在としてこのテキストに登場するのは、かなり風変わりな破天荒な校長である叔母カミーラのほかになく、アナベルの母親は不在となっている。こうした家族のイメージにあきらかなように、アナベルの「居場所」をまともな大人としての親が用意するということはないのであり、このような家族の機能不全もイジメに劣らず彼女の成長を阻害する要因となっている可能性もあるのだが、『聖トリニアンズ女学院』は、アナベルのきわめて個人的で内面化されたトラウマによって、学校間における優良／不良という格差とそこから生じる敵対関係を、まずは、描いているといえる、すなわち、チェルトナム女子学院と聖トリニアンズ女学院との関係として。

しかしながら、近代的な主体をあらわす個人が主人公としては描かれず、人種というよりは(プレモダンな社会範疇のポストモダン時代における再発明である)都会のストリート文化を特徴づける部族 (tribe) によってその集団性をとりあえず表象している『聖トリニアンズ女学院』というテキストは、人種やジェンダー、セクシュアリティのような1990年代のアイデンティティ・ポリティクスやその政治文化をそのまま単純に反映しているわけではない。チャヴという集団が端的に示しているように、部族による集団のイメージには、21世紀の現在にますますはっきりした姿をあらわしている格差問題すなわちグローバルに再編された階級と階級格差が刻印されているのを読み取ることができる。20世紀半ば少なくとも先進国と呼ばれる国々では豊かな社会つまりそれまでの労働者階級も含め「中産階級」のライフスタイルを享受できた時代がその豊かさをマテリアルに支えた製造業を中心とした経済の衰退にともなって過ぎ去り、「中産階級」のほとんど消滅とっていい状況と階級関係のスーパークラスとアンダークラスの2極化が進行している。チャヴズとは、この2極化した階級的一方、すなわち、ひょっとしたらかつての労働者階級の生活よりも劣悪な貧困にある場合もあるアンダークラスを指し示す表象であった (Jones)。学校内におけるイジメの問題は、アイデンティティ・ポリティクスによってではなく、グローバルな階級の再編によって解釈しなければならない、ということだ。

『聖トリニアンズ女学院』に表象される学校は、家族同様、このようにナショナルな人材を育成するという点でみるなら、旧来の規範的で支配的な教育空間としては、まったく機能していないように思われる。教師たちも生徒たちもそれぞれに、本来備えているべき資質を欠き、両者が教えたり学んだりする関係がそもそもまったく成立していないようにみえる。ここまでのところをまとめるなら、次のようになる。『聖トリニアンズ女学院』の物語が描くコドモの「居場所」は、どこにみいだせるのか不明のまま。少なくとも、「まともな」学校や家族が、コドモにとって確保されており、そして「成長」あるいはサヴァイヴァルの空間としての機能や意味を十分にもっている、ということはない。21世紀の現在、かつて支配的な教育空間であった学校は、20世紀の核家族と同様に、ずいぶん悪い変化をしてしまい、子どもの成長に関して、親とともに教師が本来担っていた意味を失ってしまったかのようだ。

ただし、学校の存在や存続を支える現実的あるいはマテリアルな条件という観点からこの教育空間としての機能不全を見直してみるならば、次のようにもいえる。このテキストに表象される教育空間は、2つの問題を

抱えている。1つは、財政難から経営破綻の危機に瀕しているという経済的な問題。そして2つ目に、新たに就任した教育大臣主導による学校閉鎖という問題。教育レベルの水準・業績を向上させようという政策は、一定の期間に機会を与えられて数量的に評価が可能な結果を達成できなければ、あるいは、そもそもそのような達成を成し遂げるべく自らの努力を行わないのであれば、補助金削減や廃校などそれなりの厳しい対応を迫られる、ということだ。

この映像テキストにおいて、舞台となる聖トリニアンズ女学院が財政難におちいりメインバンクの支店長から差し押さえ通告 (foreclosure notice) を突きつけられ、4週間以内に未払残高を清算しなければ倒産と言われていることに、あらためて、注目しておきたい。“You have four weeks to settle the outstanding balance or the school will be declared officially bankrupt” (Le Quesne 69)。そしてまた、校長の弟は、このような状態にある学校を、不動産売買あるいは投資の対象としようとしている。ロンドンで絵画の売買を商う怪しげなアート・ディーラーのビジネスをしているこの弟は、自分の娘アナベルをこの学校に転校させた父親でもあるのだが、さっさとこの学校を土地ごと売ってしまうことで銀行からの借金を返し、その収益の残金を2人で分けることを強く提案する (Le Quesne 74-75)。

だが、かつては成長・学びの教育制度 (an institution of learning) であった学校が、倒産の危機を警告されている、ということだけがここでの問題というわけではない。

“You can’t just pull the plug on us like some underperforming hairdressing salon. This is an institution of learning and I have a duty of care. I don’t answer to you. I answer to my girls. Girls who find no shelter in other schools.” (Le Quesne 69)

期待される結果を出せず低い実績しかもたないとしても、聖トリニアンズ女学院という存在は、教育空間として、ここ以外のほかの学校では「シェルター」・「居場所」をみつけない少女たちに対して「ケア」を行わなければならない。このような機能をもつ教育空間が義務を負っているのは、借金をして負債を負っている金融機関ではなく、そこで学び豊かな人間性とともに生活することに向けてサヴァイヴァルを試みるコドモの集団である。銀行側にとっては、女学院の生徒たちは、「一団の非行少女、あるいはそれ以上に運動場を我が物顔に占有するテロリスト (a bunch of delinquents and playground terrorist more like)」であったとしても、カミーラ校長にとっては、彼女たちの集団は「自由の闘士 (freedom fighter)」にほかならない (Le Quesne 69)。

さらにそのうえに、新たに就任した教育大臣ジェフリー・スウェイツによる教育政策が、聖トリニアンズ女学院という学校およびそこに「居場所」をみいだしている一団の生徒たちに危機的状況を悪化させることが付け加わる。文字通り高潔なそしてやる気満々の堅物の大臣は、しかるべき競争を通じて教育の機会を与えたいという結果を数値のレベルで達成できない生徒集団や教師たちからなる学校は、情け容赦なく対応することを宣言する、処罰や取り潰しを示唆しながら。“Our nation’s schools have been blighted by the false kindness of touchy-feely namby-pamby policies for too long. Badly behaved kids don’t need an arm round the shoulder, they need a kick up the backside” (Le Quesne 26)。実際、ここでの教育政策あるいは英国の教育改革として提示されているのは、経済政策の一環としての教育政策という表象ではないが、すでに断行し成功をおさめたことになっている監獄改革のアプローチを学校の「改革」に応用しようとするものだ。

“When I overhauled the prison service I began by tackling the most fractious, lawless and feared institutions around. Once I’d dealt with them the others simply fell into line.”...“We’ll take the same approach with schools.” (Le Quesne 27)

そして、もちろん手始めにターゲットとなるのが「この国で最悪の学校」である聖トリニアンズ女学院にほかならない。

ちなみに、聖トリニアンズ女学院に適用されるであろう、現代のグローバルな資本主義世界とネオリベリズムにそった監獄改革あるいはそうした監獄改革の断行に対する集団的な反乱・暴動に対する厳しい対応としての処罰・刑罰がどのようなものなのかについても、確認しておこう。¹⁰ “I was in charge of the prison service

when the Strangeways riots kicked off” ... “After dealing with a bunch of murderers and psychopaths how do you think I should react to a few naughty schoolgirls ?” (Le Quesne 28) 聖トリニアンズ女学院に帰属して学校生活をおくりとりあえずの「居場所」を得ている一団の「不良女子学生たち」は、反社会的な行動を起こしたとみなされる「一団の殺人者たちや精神病質者」と同じような仕打ちを受けることになるのがわかる。

このように、教育空間としての学校の変容を表象する『聖トリニアンズ女学院』で問題となっているのは、なによりも、コドモの「居場所」であり、この一見経済や政治すなわちマネーやパワーと切り離された自律した教育の問題が実は21世紀のグローバルな資本主義世界のさまざまな変化や動向と密接に関連して決定的に規定されていることを提示しているのがこの英国映像文化のテキストだ、ということになる。このテキストは、19世紀英国の教養小説を21世紀の現在に少しばかりの化粧直しをほどこして再生産したポピュラー・カルチャーの一例として解釈すべきではない。それは、イジメによってコントロール不能なかたちで脅迫的に反復される発作をとまなうトラウマを抱えた少女が、友人や仲間たちとの経験を通じそのトラウマを克服する過程を描くといったあくまで個人の範疇によって心理学化された成長物語などではない。そして、『聖トリニアンズ女学院』は、このように現在の資本主義やグローバルな市場の原理やルールにしたがい提示された教育やコドモの成長をめぐる困難な問題を、チャヴズすなわちアンダークラスの存在によって端的に表象されていたグローバルに再編された階級格差の問題を、想像的に解決しようと試みている少女の集団的物語として想像されてもいる。

この物語で最終的に提示される解決やその意味を解釈する前に、英国の教育政策を中心とする『聖トリニアンズ女学院』の歴史的コンテクストとはなんだったのか、ここで少しその概略を確認しておきたい。英国ニュー・レイバー、ブレア政権(1997-2007)は、教育政策に最も力を入れた。首相就任に先駆けた労働党大会においてブレアが「私がやりたいことは3つある。それは、教育、教育、教育である」と主張したことは、あまりに有名だ。ブレア労働党が教育政策を重視する理由は、おもに次の2点である。まず第1に、教育改革を経済政策の一環として位置づけることである。つまり、グローバルな経済競争を闘う競争力を強化するために、「資本」とみなされた人間の生産すなわち人材育成への投資が教育政策であるという発想である。第2に、教育政策は社会正義の実現のためという位置づけだ。教育は、人生の成功の機会と密接に結びつくものであるから、その成功の機会が出自や生まれ育った環境によって制限されるような不平等・不公正を解消するために、「質の高い公教育」が必要であるという発想である。公教育を強化し、一般的な労働者の基礎学力である読み書き・計算能力を引き上げるつまり「人的資本の質を高める」と同時に、あくまで能力によって成功の機会を開く「メリトクラシーの原理」の普及を目指す。このような労働党の教育政策は、社会正義を実現すると同時に、グローバル社会における国際競争力の強化につながるという点で、雇用政策と密接に結びついたものとして、構想されている(山口47-48)。

このようなブレア政権の教育政策は、光と影、すなわち、寛大な面と厳しい締め付けの面とが共存していた。寛大な面とは、教育予算の増加である。多額の予算が学校施設の改善に投入され、進んだICTも完備された新しい校舎においては、世界最高水準の情報・技術教育が提供されることが期待されるということだ。だが、こうした光とは裏腹に、影の部分があることがより重要だ。子どもの学力引き上げに力点が置かれ、GCSE(日本のセンター試験に相当する大学入学資格試験)などにおける優秀レベルの成績取得者の比率について学校ごとに目標が設定され、評価されるとともに、教育水準局という独立行政機関によって学校の業績について厳しい評価が行われる。また、大きな社会問題として取り上げられる児童生徒の怠学や非行について、労働党政権は、非寛容政策をとっており、規律が失われ授業が成立しない学校は、廃校という最悪の事態にいたることもある(山口49-51)。

英国ニュー・レイバーの追求する平等というプロジェクトにおいては、山口のまとめによれば、「階級社会の打破、社会的流動性の向上」が大きな目標であるが、この場合の「階級社会の打破」とは、「分配の平等や格差の縮小」ではなく、ライフスタイルに関わるもの、言い換えれば、人びとのライフスタイルや文化を変えることこそが目標とされているのであり、それこそがニュー・レイバーのいう「現代化(modernise)」によって意味したものまたはその主要プレーンのひとりである社会学者アンソニー・ギデンズの規定にそった「モダニティ」に対応したものであった。この場合の人びとのライフスタイルあるいはそうしたスタイルに規定された労働者とは、規範・模範として「市場適応型人間像」として表象された存在、つまり、市場の中に積極的に

身を投じてサクセスの可能性を追求する者が機会の平等の恩恵を受けることができると想定されている（山口177-78）。

「市場適応型人間像」は、ピーター・マンデルソンが想定する労働組合のイメージである「彼らは怠け者だ」とはまったく正反対の人間像であり、そうした「人間」のライフコースが否定的な労働者の物語としてひそかに表象されていることになる。さらにまた、競争に勝ち抜く優秀な少数者以外の人びとについては、労働党政権はどう考えているのか。山口の端的な指摘によれば、このような「普通の人々」に対して「向上の動機づけ」を与えるものがちゃんと用意してあり、各種の資格・能力認証の試験と組み合わせられた「生涯教育 (lifelong learning)」こそがそれにほかならない。それぞれの分野における技能の高度化のための訓練・研修を行うことで昇進や昇給の可能性を開くような雇用システムを構築するのが労働党政権の雇用政策の狙いである、たとえその現場で実際にみられるのが単純労働と思われる仕事であっても、そしてまた、サービス産業における低賃金の労働であっても（山口179）。

こうしてブレア政権（1997-2007）の教育政策は、グローバリゼーションやネオリベラリズム（メリトクラシー・成果主義・市場適応型のグローバル人材）に対応した経済・雇用政策であり、旧来のものづくりや製造業に対応したナショナルな人材を育成する福祉国家の否定という意味では、その前の保守党政権のサッチャリズムと同じ、あるいは、さらにそれを進めたものだともいえるだろう。「教育、教育、教育」と唱えたブレアのスピーチの意味は、次のようなことを意味していたと解釈することができるだろう。福祉国家的な経済政策・雇用政策をこの政権下での英国国家が行うことはない。その代わりに、従来の教育政策を拡張し、本来の教育政策、経済政策としての教育政策、雇用政策としての教育政策、これら3つの教育政策を、ほかの公共政策や文化政策とも連動させながら、実施していくということだったのだ。

4. グローバル化するポピュラー・カルチャーのなかのコドモの「居場所」とその変容 ——歴史的かつグローバルに認知・解釈する

現代資本主義世界のグローバル・ポピュラー・カルチャーの映像テキスト『聖トリニアンズ女学院』における、変容した教育空間とはどのようなものだったのか。この問題をあらためて考えることで、21世紀現在のコドモの「居場所」について、その成長の物語あるいは表象とともに、考えてみたい。結局、グローバルな資本主義世界に対応して書き換えられたガールズ・スクール・ストーリーとしてのこの物語が表象する聖トリニアンズ女学院という教育空間の意味は、どのように解釈することができるだろうか。すなわち、「自由奔放で規律がない聖トリニアンズ女学院」は、新教育大臣のジェフリーが立て直そうとした「“まともな”学校」とはどのように異なるタイプや様式で、新たな教育的意味をもつ学校として再編されたであろうか。

英国映像文化としての『聖トリニアンズ女学院』が提示した教育空間としての学校の危機的問題は、この絶体絶命のピンチから学園を救うために立ち上がったアナーキーな生徒たちが、たしかに怖いもの知らずだが逆にいえばその無知を逆手にとってきわめてアクティブにサヴァイヴァルの作戦・戦略を企てることにより解決される。聖トリニアンズ女学院のコドモ集団は、教員や仲間を巻き込んで団結・協働し、知識やアイデアを集結させる。美術館からフェルメールの絵画を盗み出すという世紀の強盗という企てを、グローバルなポピュラー・カルチャーのひとつである、学校対抗のTVクイズ番組を放映するメディア文化と思ってもみない独創的な想像力と思考力で組み合わせ、最終的に、学校自体のマテリアルなサヴァイヴァルとまともなかたちで社会のなかに「居場所」をみつけることができない自由を強力に欲望する少女たちの帰属する場所を再発見・再発見することに成功する。

この成功にいたる物語の過程において、史上最強(?)の不良女子高への転校生であったアナベルは、イジメに限定されないさまざまな試練やそれをほかのコドモたちと集団的に解決する経験を通じて、「真面目くさった優等生タイプ (the prim goody-goody)」から「トレンドイな制服を身に纏ったセクシー・ガール (a foxy girl with a trendy uniform)」に変容することになる (Le Quesne 118-19)。より注目すべきは、「中身スッカスカの落第生型のチャラ系女子 (a washed-up slapper)」からネオリベラリズムの世界でサヴァイヴしたり勝ち組になれるグローバル人材としても通用しそうでもある、英国の「賢く (smart)」で「カッコイイ (cool)」少女に変身したお嬢様系集団のメンバーのひとりかもしれない (Le Quesne 136-37)。化粧やファッションと富豪ある

いは裕福な男たちとのセックスを主とした人間関係にしか興味のなさそうなチェルシーのこれまでの毎日の生活は、モデルやタレントを発掘するリアリティ TV への出演を欲望し、ライフスタイルを商品化したセレブのような社会階層へと成り上がるのが彼女の夢見たサクセス・ストーリーであった。ナショナル・ギャラリーに展示中のフェルメールの『真珠の耳飾りの少女』を強奪するときの監視の目をくぐり周囲の注意をそらすカヴァーを目的に外見の容姿やそのスタイルを生かして出場したTVクイズ番組の決勝戦で、無線を通じて答えをカンニングしていたことが発覚して、すっかり自信を失った彼女は、もはや完全に「居場所」を見失い、その場から逃走しようとするのだが、ここですっかり変化してしまいその機能をはたすことができなくなってしまったかにみえた教師と学校の存在が新たに表象される。

I've been watching you, you little madam, with your girlish wiles, your saucy ways and now, it seems, your criminal cunning," Miss Dickinson was on a tirade. "You know what you are, don't you?" "A washed-up-slapper?" Chelsea replied tearfully. "Smart." "Huh?" Chelsea couldn't believe her ears. "You're smarter than you think," the teacher said gently. "I am...?" "And smart is cool." Miss Dickinson continued. "It is...?" asked Chelsea, flabbergasted. "Trust me." Miss Dickinson brushed the hair from Chelsea's eyes. (Le Quesne 136-37)

このように、チェルシーをケアと気遣いとともに見守り、その承認欲求を充たす役割をはたしたのは新任の国語の先生ミス・ディキンソンであった。そして、このようなコドモの新たな成長としての変身とその学びをサポートする先生の承認が遂行される空間は、英国の公共美術館ナショナル・ギャラリーというもともとはハイ・カルチャーを展示する場所で行われた、グローバルなポピュラー・カルチャーの代表例のひとつであるTVクイズ番組だった。つまり、この自己実現と承認の場面が実質的に出来し提示されるのは、変容した学校が新たに構築された教育空間、言い換えれば、英国映像文化をその部分とするグローバルでトランスナショナルなメディア文化を媒介にして、あるいは、その文化を発信・流通させるメディアを十分に活用して編制されることで新たな意味を獲得する可能性を示したこれまでの過去や現在にはいまだ十全には姿をあらわしていない未来に向けた学校にほかならないのかもしれない。

『聖トリニアンズ女学院』の少女たち、あるいは、コドモの「居場所」はどこにあるのか、問いを発してみるならば、かつては、核家族や地域コミュニティ等とともに、国家と個人を媒介した空間だった学校は、その支配的だったナショナル人材を育成する機能においてはすっかり変化したとはいえ、いまや、すっかり変容しその教育空間としての存在意味は、まったくなくなってしまったのではなく、新たな機能をはたすように変容することが強く求められていることが理解できるのではないか。言い換えれば、変容する教育空間における学校とその新たな意味は、かつての主体化を主な機能とした国家イデオロギー装置から、グローバリゼーション時代の多様に交錯するトランス・メディア空間に媒介された公共圏へ、変容することに向かっているのではないか。

念のために、チェルシーに典型的にみられるような現代のコドモの成長について確認しておくならば、グローバル化するポピュラー・カルチャーのなかのコドモあるいはその集団は、19世紀英国の教養小説のように、大人の国民へ「成長」というわけではない。『聖トリニアンズ女学院』の少女たちは、永遠にイノセントな自由な少女のまま、その持続可能性をもちながらグローバルな地球「市民のモデル (model citizens)」・「世界中あらゆるところにいる若者の模範」(Le Quesne 147) へ「変身」する——フェルメールの絵を盗む行為・パフォーマンスは、絵画のアナベルの父親がそのビジネスとして関わる美術品のグローバルなブラック・マーケットにおけるきわめて「スマート」で「クール」な売買あるいは「詐欺」ともいえる虚構性を媒介としたリアルな売買のイメージ・シミュラクルが介在していたのであり、強奪したと思われた絵画は、実は、それを美術館に返還しようとした少女たちが遺失物として故ダイアナ妃お気に入りのデパート、ハーヴェイ・ニコルズの化粧室で発見した、とTVニュース番組のメディア報道で知らされることになる——。過剰な肉体的の表象であったチェルシーは、TVクイズ番組への出演を契機にしたさまざまな経験を通じて、精神と肉体の調和した統一を獲得した、と旧来の小説論の解釈図式に無理にあてはめることも不可能ではないかもしれない。しかしながら、彼女が経験した「成長」は、むしろ、「反成長」あるいはそれにきわめて近い「非成長」とみなすべきではないだろうか。成長というよりは、そうした過去の成長の変容としての持続可能性 (sustainability) といった概念によって把握したほうがいいのかもかもしれない。少なくとも、『聖トリニアンズ女

学院』が「成長」という旧来の図式をパロディのために引用しながら表象するのは、近代的主体というよりは、ポストモダンな主体性の記号・イメージ・シミュラクルである、つまり、その「主体」や「成長」はメディアにおけるあるいは文化的なパフォーマンスや表層・見た目の変身・変装の効果としてのみ可能なものだ、と結論づけることができるものだったのではないか。

最後に、コドモの「居場所」を歴史的かつグローバルに認知・解釈する作業のとりあえずのまとめとして、英国の社会学者ジョック・ヤングが、近代から後期近代へ、福祉国家からグローバルなネオリベリズムへの移行の歴史をたどりながら、ブレア／ニュー・レイバーの第3の道、とりわけ、ネオリベリズムに彩られたサッチャリズムの排除からニュー・レイバーの過剰包摂の問題を米国を中心とするグローバルな資本主義世界の批判的考察として提示した『後期近代の眩暈——排除から過剰包摂へ』に言及しながら、論じてみたい。まず、コミュニティの変容について。地域社会あるいはコミュニティの必要性は、日本の教育の現場に対しても学校との連携が要請されていたことではあるが、ヤングが引用するジグムント・バウマン『リキッド・モダニティ（液化化する後期近代の社会）』が指摘するように、そうした必要性をめぐって激しい論争が起こったのは、そもそも「コミュニティ」の表象や像に映し出される現実が本当の現実かどうかわかりづらくなってきたからだという。別のいい方をすれば、伝統的な規範・社会構造・価値観が異常なまでに液化化し分解してしまったせいで、先進世界の多くの住民が孤児になったように自己の「居場所」を失い、そのせいでますます、確実に消え去ることのないと信じる帰属集団を探し求めている。このような後期近代の社会を貫いているのは、社会性を失った世界、あるいは、社会的な場所が喪失されたイメージであり、そこでは旧来の成長物語としての教養小説にみられた物語がすっかり崩壊してしまう。空間と文化がナショナルな時空間のなかにおさまりきれずよくもわるくもグローバルなメディア空間を媒介にして回路がつながれいきなり自己と「セカイ」が結びついてしまう。このような挿話や断章の寄せ集めのような社会にあっては、人びとは自己のアイデンティティの物語やライフストーリーを従来のように直線的にたとえば精神の成長として展開することはもはやできない（ヤング327-29）。

ヤングによれば、このような近代から後期近代への変容は、福祉国家からグローバルなネオリベリズムへの移行の歴史によって説明できる。第2次大戦後の大規模なフォーディズムは各人が熟練度や達成度によって当然支払われるべき報酬をわかりやすく比較しあうことを可能にした、しかしながら、製造業の衰退とサービス産業の台頭によって、このような報酬の平等は担保されなくなってきた。現在のネオリベリズムとその主要プレーヤーである多国籍企業あるいはロンドンのようなロケーションで不動産から得る不労所得を得る階層の人びとにみられるのは、きわめて恣意的な報酬の現実である。しかるべき報酬を獲得できるかどうかは、福祉国家期にみられたような比較的長い期間の雇用に基づき習得された能力の評価ではなく、めぐりあわせ、運あるいは宿命によると多くの必ずしも裕福ではない人びとは感じているのではないか。報酬の恣意性といった要因は、ブレア政権のメリトクラシーのかけ声とは裏腹に、きわめて反能力主義的である、とヤングは主張する。そもそも、いったいなにが能力なのか、能力がなにであれ報いがあるのかどうか疑問に付される。

液化化した社会・社会性なき「セカイ」に特徴づけられたグローバルな資本主義世界とネオリベリズムへの移行は、階級構造の変容・神秘化に関わることを、ヤングは最後に指摘している。

こうしたことの一切は階級構造の平準化という経験を生じさせる。階級が消滅したわけではない。...アッパークラスとアンダークラスのふるまいや価値観こそが、現在最も関心を集める問題なのである。ところが「アッパークラス」「アンダークラス」をあらわす言葉の含意は根底から書き換えられた。...かつてこの2つの階層の間に...微妙な差異を保ちつつざらり密集して並んでいた〔下層中産階級をはじめとする諸階級〕が今では平準化したと感じられるようになった。...消滅したのではなく、この領域がわかりにくくなり、もはや目立たないものになったのだ。...労働者階級とアッパークラスの代わりにあるのはアンダークラスとセレブリティでありその狭間に...「普通階級・ミドルクラス」がいる。この新しい社会的階層は、安定した仕事をもち、またおそらくは健康保険をもつ人みなを指すアメリカ的「中産階級」の一般的な用法に典型的にあらわされる。（ヤング128）

夥しい量のメディアが、セレブに焦点をあてることに、こうした階級構造の平準化という経験が示されている

のかもしれない。一方に煌びやかな他者がいて、他方に、アンダークラスすなわちチャヴズがいる。その間に、階級的下降・脱落の不安におびえつつほかの上位の階級をはじめとする人びとをルサンチマンたっぷりに羨望・嫉妬する中間にとりあえず位置する階級が存在する。この「普通」階級はさまざまなかたちに分枝しているが、「こうした分枝は経済的階級よりもアイデンティティによって実感される。つまりジェンダー、年齢、エスニティ、性的志向、身体能力は、人びとにとってより実体的なものになり、そしてこのことによってアイデンティティ・ポリティクスが階級政治の上に重ねられようとしている」（ヤング128-29）。21世紀の現在にみられたのは、分配的正義に配慮する社会から承認に配慮する社会への転換、階級政治からアイデンティティ・ポリティクスへの転換だ、ということになる。

本論は、旧来の「教養小説」が描いた子どもから「グローバル・ポピュラー・カルチャー」との対立・矛盾を孕みながら対応した英国映像文化に表象されたコドモの「居場所」の変容の意味を探ることにより、20世紀前半から20世紀後半さらに21世紀への資本主義世界の変化、そして、それにとまなう子どもの変化とりわけ学校の変化にみられる教育空間の変容を、歴史的に解釈することを試みた。旧来の福祉国家から1980年代以降急速に先進国で台頭し経済ならびに政治はもちろん社会や文化や教育におよぶあらゆるレベルで進行するのがみられたネオリベラリズムへの資本主義世界の変容において、旧世界の学校の子どももこうした新たな社会性なき「セカイ」のコドモへ変化がみられたことが、確認された。こうしたさまざまな変化は、労働者の再生産というレベルに翻訳・トランスコード化するなら、もはや近代国家の国内を中心とする製造業におけるナショナルな人材すなわち国民ではなく、グローバルな資本主義市場に適応し有用とされる人材が求められることを意味する。この意味で、コドモの「居場所」や成長する子どもをめぐる変化の問題は、なによりも、旧来の教育空間としての学校の変容とわちがたく関連していることを認知しなければならない、と同時に、トランスナショナルな諸メディア空間やさまざまなコミュニティとネットワーク化されつつ連携が模索されるように新たな構築・編制がなされている教育空間において、¹¹ 学校やクラスルームにおける教育・学習がその少なからざる役割をこれまでとは別のやり方で担う学校の新たな意味の可能性についても、具体的な実践のイメージにつながるように想像したり思考したりすることができることを、本論は示唆しようとした。

* 本研究はJSPS 科研費JP25370273の助成を受けたものです。

Notes

- 1 かつて、「青年期」・「思春期」における「自我の目覚め」・「主体性」あるいは（青）少年非行（犯罪）といったことが語られたとき、第2次大戦後に米国の心理学・社会学が発明した術語・概念であるアイデンティティが使用された。アイデンティティというタームは、自己同一性や社会化された私といった概念とともに「近代的主体」の表象・イメージに関わるものであった。こうした概念や表象は、戦後の日本においては、いわゆる講座派による日本資本主義発達論やそれを引き継いだ近代化論や市民社会論、または、さまざまな近代日本文学史においても、使われたのであるが、その後、近代的主体を成型する主体化＝従属化（subjectification）のイデオロギーの批判や構造主義以降の「理論」とその言説さらにはフェミニズム・ジェンダー研究、セクシュアリティ研究、植民地主義・ポストコロニアリズム等々の議論をへて、いまでは、個人というよりは、さまざまな社会的差異をマーカーとする社会的マイノリティを含む諸集団とその帰属意識・「居場所」の表象が問題とされたり議論されたりするようになってきている。すなわち、子どもの成長あるいはコドモの「居場所」の問題を議論するときのキー・タームが、アイデンティティから帰属へ変化してきた、といえるかもしれない。
- 2 「子どもの発達」、あるいは、子ども／コドモの成長に関する課題については、通知のテキストは、脳科学や心理学等の最新の知見に基づく内容、そしてこの内容には「特別支援教育に関するものを含む」とされており、そのようなかたちで適切に扱うことが記されている。実際、留意事項にはLD（Learning Disabilities）すなわち学習障害やADHD（Attention Deficit / Hyperactivity Disorder）すなわち注意欠陥・多動性障害はじめ特別支援教育に関する新たな課題については、必ず扱うこととされている。ここでは、「子どもの変化についての理解」が、「子どもの発達に関する課題」と「子どもの生活の変化を踏まえた適切な指導の在り方」に差異化され区別されていること、および、後者の下位範疇である留意事項の欄のなかで「子どもの生活の変化」が「生活習慣の変化」として反復される、とともに、「社会的・経済的環境の変化」と並列されていることを、そうした記述・提示自体の事実とその意味について体系的かつ歴史的な解釈をおこなう前に、目印

をつけておきたい。

- 3 新たに構築されることが期待されているらしい地域社会・コミュニティとの連携との関連において、「情報セキュリティ」ならびに「対人関係、日常的コミュニケーション等の重要性」が併記されているのはともかく、これらと一緒に、現代資本主義世界やその市場を旧来の福祉国家ではなくネオリベラリズムの現在から論じるときのキーワードである経営学の言説＝マネジメントが使用されているのは——「学校組織の一員としてのマネジメント・マインドの形成」——、学校や教育空間をめぐる現在の歴史性のひとつの兆候となっているかもしれない。
- 4 英国映像文化については、大谷・大田ほか『ポスト・ヘリテージ映画』および河島・大谷・大田『イギリス映画と文化政策』が、具体的に、論じている。
- 5 子どもから大人への成長を物語る教養小説とはまた別のかたちで、子どもの成長を表象するジャンルとしての児童文学については、また別に論じる。これに関連してひとこと付言しておくならば、現在のハリー・ポッター・シリーズや宮崎アニメにみられるように、旧来の子どもと大人の区別や境界がなくなってきている。ハリウッドのCGを大幅に使用したディズニー・アニメ、マーヴェル・コミックの映画化、あるいは日本および海外におけるゲームや美少女フィギュアの例をみても、その拡がりや変化のスピードを感じることができるだろう。たとえば、ハリー・ポッターの物語と旧来の児童文学との差異は、文学および文化が、ナショナルな枠組みを超えて生産・流通・消費される過程において、その両者の間の区別や価値に関する階層関係がなくなり、グローバル化したことにあるかもしれない。すなわち、J・K・ローリングのテキストならびにその映画化を含むさまざまな表象・商品イメージは、グローバル・ポピュラー・カルチャーの一部としての英国映像文化としても機能しているという点で、旧来の児童文学というよりは、「ポピュラー・チルドレン・リテラチャー」になったといえるかもしれない。ハリー・ポッター・シリーズ以降の現在から旧来の児童文学の歴史の書き換えを行っているのが、Briggs, Butts and Grenbyである。
- 6 旧来の日本の教養小説はどのようなものだったか、そしてそのナショナルな成長はいかなるものだったのか、という問題はさわめて興味深いものであるものの、そして、21世紀の現在から、あらためて、ナショナルだけではなくグローバルにもそうした問題を論じることは、実は、時空間のねじれや共存を丁寧に解きほぐしながらテキストならびにそのテキストに関する研究・教育の言説からなるメタテキストを読み直し再解釈する作業をへたうえでなければあまり意味がないかもしれないという点で、なかなか難しいところもあるという感じをもっている。ここではこの問題を、正面切って論じる代わりに、そうした作業を開始するうえでいろいろ歴史的にもイデオロギー的にも興味深いかたちで問題を孕んでいる小説論のひとつである、まず、江藤を、そしてまた、彼の議論を下敷きにしてフェミニズムあるいはジェンダー研究の観点から議論している部分を含む上野ほかを、参照すべきかもしれないことを指摘しておく。また、冷戦期とりわけ1960年代高度経済成長期の日本という歴史的コンテクストに注目するなら、その時期の代表的ポピュラー・カルチャーのテキストであるまんが・アニメを取り上げて教養小説として位置づけ・価値評価を試みたものとして、大塚・ササキバラの議論がある。
- 7 2000年に設立された非政府部門公共機構 (non-departmental public body) であるUKフィルム・カウンシルの誕生や役割およびその後の変化をめぐる歴史的コンテクストを含め、英国の映像文化と文化政策の概観については、河島を参照のこと。河島によれば、文化政策に新しい流れすなわち経済産業政策としての意味をもち始めた文化政策という流れを産み出したニュー・レイバーは、従来の組織を改変して生まれたUKフィルム・カウンシルにおいて、「映画産業・映像文化の育成」につとめることとなった。「具体的には、映画産業関係者の研修支援、映画プロジェクトの企画開発に対する資金助成、実験的な映画やショートフィルムへの資金助成、そしてグローバルな市場での競争力が高いと思われる映画プロジェクトへの資金助成などを行ってきた…この後、映画の文化的・社会的貢献という側面も強調されるようになり、そういった助成活動も担当するようになる」(河島23-24)。ただし、2010年の総選挙で保守党が勝利をおさめてからは、新しく首相となり財政の大幅縮減を断行したキャメロンにより、UKフィルム・カウンシルは2011年4月に廃止となった、そして、その機能は、従来からある英国映画協会 (British Film Institute, BFI) に移行された。
- 8 この風刺漫画 (Ronald Searle, *St Trinian's: The Cartoons*. London: Penguin, 1941.) は、20世紀初頭あるいは戦間期以降の英国で、学校や家庭では必ずしも推奨されたわけではないが少女そして部分的には少年にもポピュラーであった、たとえば、アンジェラ・ブラジルが書いたガールズ・スクール・ストーリーのパロディとなっており、教師はサディスト、女生徒は非行の常習者として描かれている。
- 9 プレア／ニュー・レイバーのいわゆる「第3の道」の政策においては、福祉国家の国家ともグローバルな市場の原理を推進するネオリベラリズムにおいて勝ち組・負け組は自己責任とされる個人 (主義) と異なる、第3の地球市民・グローバル・シティズン (公民) の協働・アソシエーションや連携・パートナーシップによって形成・編制される新たな集団・

コミュニティの重要性が議論されていた。別の言い方をするなら、アイデンティティを形成する空間あるいは「居場所」が、従来の国家と個人を媒介する家父長中心の核家族でもなければ、先生の一方的指導をモデルとするような座学中心の学校教育とも異なる、新たな教育空間の必要性が現実のコミュニティあるいはメディア文化を媒介にしたサイバー空間のなかに新たに必要とされていたのであり、学校や家族もそれに応じて変化することが期待されていたといえるかもしれない。たとえば、学校の場合でいえば、本論の最初で読解を試みた「平成20年4月1日付け文部科学事務次官通知」の「講義内容に関する各種基準」の事項にも挙げてあったような、「多様化に応じた学級づくり」、「居場所づくり」= アイデンティティ・帰属 (belonging) を意識した「集団」形成といった内容が、英国映像文化としての『聖トリニアンズ女学院』およびその歴史的コンテクストをなす英国国家の公共政策・教育政策に対応しているところかもしれない。

- 10 グローバリゼーションやネオリベリズムの進展と連動し、さまざまな自由化・民営化・規制撤廃という市場の原理と一見したところ対立すると考えられる国家のナショナルな諸公共政策——そうした政策がいずれ文化政策や教育政策においても反復されることになるような政策——を再考して論じたロイック・ヴァカン『貧困という監獄』は、米国をそもそもの拠点とし、ブレア・ニュー・レイバーのロンドンを、さらなるグローバルな拡大・拡張に向けた中継点とする、監獄改革について批判的に検討している。実のところ、増大する貧困層を、あるいは、グローバリゼーションにおける競争に勝ち残れず敗者となった人びとを、厳しい刑罰政策によって管理するような、刑罰国家として、21世紀現在、国家は変容したあるいはその意味・機能を変化させたことを、ヴァカンは論じている (ヴァカン)。
- 11 ひょっとしたら、グローバルな資本主義世界にみられるこのような教育空間の変容とそこで新たな意味を獲得する学校の意味を、否定的だけでなく肯定的にも考えるときのスローガンとして、次のようなフレーズがとりあえず提示されるかもしれない。すなわち、国家イデオロギー装置から、グローバリゼーション時代の多様に交錯するトランス・メディア空間に媒介された公共圏へ。

Works Cited

- Briggs, Julia, Dennis Butts and M. O. Grenby, eds. *Popular Children's Literature in Britain*. Surrey: Ashgate, 2008.
- Jones, Owen. *Chavs: The Demonization of the Working Class*. London: Verso, 2011.
- Le Quesne, Pippa. *St Trinian's*. Based on the Screenplay by Piers Ashworth and Nick Moorcroft. London: Penguin, 2007.
- 上野千鶴子ほか『男流文学論』東京：筑摩書房，1992.
- ヴァカン，ロイック『貧困という監獄——グローバル化と刑罰国家の到来』森千香子・菊池恵介訳 東京：新曜社，2008.
- 江藤淳『成熟と喪失』東京：河出書房新社，1967.
- 大谷伴子・松本朗・大田信良・加藤めぐみ・木下誠・前協子編著『ポスト・ヘリテージ映画——サッチャリズムの英国と帝国アメリカ』東京：上智大学出版，2010.
- 大塚英志・ササキバラゴウ『教養としての〈まんが・アニメ〉』東京：講談社，2001.
- 荻谷剛彦・山口二郎『格差社会と教育改革』東京：岩波書店，2008.
- 河島伸子「英国の文化政策と映像文化」『イギリス映画と文化政策——ブレア政権以降のポリティカル・エコノミー』河島伸子・大谷伴子・大田信良編 東京：慶應義塾大学出版会，2012. 3-25.
- 河島伸子・大谷伴子・大田信良編『イギリス映画と文化政策——ブレア政権以降のポリティカル・エコノミー』東京：慶應義塾大学出版会，2012.
- 川本静子『イギリス教養小説の系譜——「紳士」から「芸術家」へ』東京：研究社，1973.
- ダワー，ジョン『増補版 敗北を抱きしめて』三浦洋一ほか訳 東京：岩波書店，2004.
- 山口二郎『ブレア時代のイギリス』東京：岩波書店，2005.
- ヤング，ジョック『後期近代の眩暈——排除から過剰包摂へ』木下ちがやほか訳 東京：青土社，2008. [Young, Jock. *The Vertigo of Late Modernity*. London: Sage, 2007.]

フィルモグラフィ

- 『聖トリニアンズ女学院』(St. Trinian's), オリヴァー・パーカー, バーナビー・トンブソン監督, ピアーズ・アシュワース脚本, 2007年 (DVD, アットエンターテインメント).